

令和 元年 6月 20日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01612

研究課題名(和文)「いつの間にか」動いているダンス授業の検討 - 動きが表現になる瞬間をつかまえる -

研究課題名(英文) A study of dance learning in without awareness-catch the moment when motion is expressed-

研究代表者

寺山 由美 (TERAYAMA, Yumi)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号：60316784

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ダンス学習において学習者が「いつの間にか」表現している状態、つまり学習者の「動きが表現になる瞬間」を捉えることを試みた。そのために重要となる指導は、学習者の意識をどのようにスムーズに創意へと運ぶかが重要であることがわかった。そして、課題となるイメージをいかに明確に学習者に共有させることができるかということと、いかにムーブメントを創出させることができるかということが重要であることがわかった。

また、指導では学習者の「自主性の喚起」や「音楽の選定」「空間の指定」が有効に働くことが明らかとなった。学習者への課題がスモールステップから提示されることも重要であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

体育における表現運動・ダンスは、定型のルールや運動がないため、教えにくい領域とされている。しかしながら、他のスポーツ領域では不得手な学習者もダンスなら楽しく運動できることも多く、体育に中でダンスの指導法を検討することは社会的意義の大きなことと考えられる。

今回の研究において、ダンス学習の指導に役立つ知見を明らかにすることができた。多くの学習者が無理強いされることなく、能動的に身体表現を楽しむことができる授業を検討するために、今回の結果を踏まえて今後さらに発展させることが可能となった。

研究成果の概要(英文)：In this study, I tried to capture the situation where the learner is expressing "without awareness" in dance learning, in other words "instant moment when the movement becomes an expression" of the learner. It turned out that the important instruction for that purpose is how to smoothly convey the learner's consciousness to creativity. And it turned out that it is important how clearly the learner can share the image which is the task and how it is possible to create the movement.

In addition, it became clear that "voicing of independence" and "selection of music" and "designation of space" work effectively in teaching. It was also important that the task for the learner be presented from the small step.

研究分野：舞踊教育学

キーワード：ダンス学習 表現 即興表現

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究開始前から、学習者が「いつの間にか」動いている状態になるダンス授業を検討してきた。なぜなら、ダンス学習では踊ることや表現することに対して躊躇する学習者が多いと考えていたからである。しかしながら、実際にはそれ以前の問題があることがわかった。例えば、現在の中学生は二人組になることができない。見知っている相手であっても「話したことがない」という理由で二人組が作れないのである。昨今の中学生は、同じ学舎にいる友人でもコミュニケーションをとることが難しい。このことは、体育においてダンスのみならず他領域(種目)においても同じ状況が起こる。つまり、運動そのものを楽しむ以前に、他者と関わりを持つことに負担を感じる子供たちが存在する。

しかしながら、学習困難校といわれる公立中学校でのダンス学習(中学3年女子)に関わった際に、ダンス学習の可能性を痛感することがあった。今の子どもたちは、他者と関わることを切望しているのではないだろうか。ダンスには、理屈抜きで他者とつながる力がある。その根源性があるがゆえに、時代も空間も越えてダンスは存在し続けた。ダンス学習は、昨今の子どもたちのコミュニケーション力の低下、運動をしない中2女子問題などが叫ばれる今日、学習者の身体に貢献できる可能性は高い。

本研究で「いつの間にか」という点に着目したのは、2つの側面からである。まず、これまでの研究において熟練指導者の指導を分析すると、それぞれ方法は異なるが、学習者が「いつの間にか精一杯動いていた」という状況を作っていたことが共通していた。舞踊教育の研究では、学習者が恥ずかしがらずにダンス学習を楽しめることをテーマに取り上げたものも多い上に、体育学習として運動量の確保を狙うことからキーワードとなると考えた。次に、人は「いつの間にか」表現してしまっていることを再認識するためである。ダンス学習において「表現」は重要な要素である。自己表現という無理して自己開示するようなイメージを持ってしまいがちである。しかし、そもそも身体とは雄弁であり、表現しようと思っていなくても人は「いつの間にか」表現してしまっている。つまり、先の中学生の例で考えると、様々な友人とかかわっていく行為そのものが、知らぬうちに他者へ「一緒にやろう」という表現になっているのである。学習者にとっては、無自覚のうちに踊っていたら、話したことのない友だちと踊れたと自覚できたという小さな気づきかもしれない。しかし、このような小さな自己変容を積み重ねることが、次世代のダンス学習内容として着目されるのではないかと考える。

2. 研究の目的

以上のような背景を踏まえ、本研究では、「いつの間にか」動いているダンス授業の検討を通して、「表現すること」を再考し、新たなダンス学習内容の一面を明らかにするものである。このことを実現するために、「理論的研究」と「実践的研究」からアプローチする。

3. 研究の方法

本研究は、「理論的研究」(以下、理論)と「実践的研究」(以下、実践)からアプローチする。「理論」: いつの間にか「表現すること」を再考する。特に、海外における舞踊教育を概観することにより、「表現すること」の概念を明確にする。「実践」: 「いつの間にか」動けるダンス授業について調査を行う。指導に定評のある指導者の授業を観察し、学習者が「いつの間にか」表現している状況をどのように作っているのかを明らかにする。

4. 研究成果

「理論」について～身体表現について～

動きが表現になる瞬間を捉えるために、目指す授業の理論構築を行うことであった。そのため、身体で「表現すること」の「理論」を整理した。

まず、芸術論や美学の理論的背景をもとに、ダンス学習をみると「模倣の概念」が様々に捉えられていることが明らかとなった。舞踊教育の「模倣」の問題は、「模倣がコピーになってしまうこと」、「模倣に付随した一斉教授法が子供の創造の可能性を狭めてしまうこと」などが考えられた。教育上の学習としての模倣、舞踊の本質としての模倣、舞踊を学習させるための教材としての模倣、の三つの視点で議論を整理した。

ダンス学習の場面では、学習方法としての模倣と学習内容としての模倣が同時に起きていることを確認し、学習の手段として模倣の有効性に言及した。このような学習者の身体が模倣を行う場合、イメージが関与している。ダンス学習では、目の前にあるものを模写するわけではない。学習者が毎日の生活の中でどのようなイメージを蓄えているかが問題となる。なぜなら、模倣はただ、写實的にコピーすることではなく、学習者の内面を身体運動に表すための行為だからである。その意味で、模倣は身体表現と連動している。そして、学習者の内面を表すということは「自己表現」ともいえる。

教育では、自己表現力の向上は求められることである。しかしながら、自己表現には、「無自覚な表出」「意識しての表出」「自覚しての自立探求から表現」という段階があり、学習者に性急に「自己表現」を求めることは望ましいこととはいえない。学習者の自己表現は、表現と表出のはざまを行き来しながら現れ出る。それゆえ、ダンス学習者における即興表現には意義がある。また表現教育としては、表出しはじめた学習者に対して時間をかけて表現に導く

ことが重要である。ダンス学習においては、作品を発表するという形式のみを表現とせず、即興表現にて学習者の身体が表現したものを自己表現と捉えていく視点が大事になる。自己表現は自己開示を強いるものではなく、結果的に自己表現が自己開示になる場合もあるという捉え方をする必要性がある。自己表現は、学習者が学びの中で変わることにより起こるものである。

「理論」について～身体と表現について～

「身体表現」の「身体」について考察を深めた。次に、「表現」の考察を行った。そこから、身体の動きによる身体表現のあり方について考察を行った。その上で、表現運動・ダンス学習においては、学習者の「運動する身体」を捉える必要があり、滝沢文雄の述べる「身体運動を生じさせる主体としての身体」がどのように表現するかに着目しなければならないことが明らかとなった。

体育において、ダンス学習を行う意義は、多様に考えられる。しかしながら上記の理論背景から、学習内容としての「意図のある」動きの形成がダンス学習の学習内容の一つとして考えられた。ダンス学習においては、「動き方」について小学校から高等学校まで、学習者は「即興的な表現」を行うことが共通の学習となっている。ゆえに、「どのように動くか」という問題は、学習を進める上で留意すべき点となる。表現系ダンスでは、「表現」ということが第一義の内容になる。しかしながら、ダンス学習場面では、「なんとなく動いている」学習者に会うことがある。そこで、「意図のある」動きに着目すること有用であると考えられた。

学習者自身が、どのように身体を動かして、どのような表現をしてしまっているかを自覚させることができる可能性が示唆された。これは、体育における「身体観の教育」に寄与できることと考えられる。

「実践」～ある指導者の授業より～

「実践」の結果として、即興表現に定評のある指導者の授業を半年間観察した。そして、その指導者がどのように学習者を導いているかを記録した。また、指導者の行為についてなぜそのようにしたのかをインタビュー調査を行って記録した。指導者の指導法や学習者への声掛けを通して、「動き」から「表現のある動き」に移行する瞬間を捉えることが可能となった。授業観察から見えた、「表現のある動き」に移行させる要因として、「自主性の喚起」「音楽の選定」「空間の指定」があげられた。指導者は、学習者が「やらされている」のではなく、自ら動きを探究するように誘導していきながら、課題に相応しい音楽を使用していた。このことにより、学習者はいつの間にか表現性の高い動きへと変化していった。また、指導者が提示する即興課題は、空間性を意識しているものが多かったのも特徴的であった。

これらをさらに分析すると、指導者の働きかけとしては、学習者の「自主性の喚起」が重要であることがわかった。様々な方法で学習者へアプローチをすることで、学習者自らの創意に気づかせていることがわかった。さらに、指導方法の具体的な手段としては「音楽の選定」が重要であった。音楽の確実な選定により即興課題のイメージが明確になり、学習者が自発的に動き、表現していることが明らかとなった。加えて指導方法の具体的な手段として「空間の指定」があげられた。空間を指定しつつ、運動の課題を特定することで学習者が動きを創出しやすくなる工夫がなされた。ダンスのムーブメントとして、対極の動きを連続するように仕組まれた空間の指定は、学習者の創意を増す上に気軽な気持ちで取り組める有効な手段であることがわかった。また、これらの課題がスモールステップから徐々に課題を複雑にしていくことで、学習者の学びがスムーズである様子も見受けられた。

「実践」～研究者の実践から～

また、自らの指導を受講した学生や教員に同一のアンケート調査を行った。この調査は、研究者が指導するダンス学習の中で、受講生が「いつもの間にか」表現していたと感じられる教材は何かを回答してもらったものであった。その中で一番回答が多かったのが、「コピー」という教材であった。これは、ゲーム感覚で簡単な課題に徐々に課題を重ねていき即興表現に導くものである。次に多かったのが、「イメージカルタ」という教材であった。これはカードをひっくり返すと課題が描かれており、すぐに即興的に表現するというものである。

どちらの教材もゲーム感覚で動いているうちに「いつの間にか動いていた」「いつの間にか表現していた」という回答が多く、気がついたら踊っていたという感覚を受講生が体得している様子がわかった。

『ダンス』と『表現』は違うことがわかった」という内容の回答も数名の教員から得ることができた。一般的に捉えている「ダンス」と体育授業として展開したい「身体表現」とのイメージの違いがあることが改めて明らかとなった。ただ、ダンスを学習者におどらせることが目的ではなく、身体の育成を目指しているという点を教師に理解してもらう必要がある。

「いつの間にか」表現する授業

学習者が「いつの間にか」表現しているという状況を作り出すためには、学習者が自ら能動的に動けるような課題の設定が重要であることがわかった。それを助けるのが、音楽の効果、ゲーム性である。そして、与える課題を簡単に動けるものから設定し、空間を変容させながら

課題を重ねていくこと重要である。今後はこれらの点に考慮してダンス学習の指導法を検討することが有効であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4件)

- 1) 村瀬瑠美, 寺山由美(2018): 他者作品を踊る際の踊り手による作品イメージの現実化の取り組み: 振付の動きの習得との関係性に着目して. 舞踊教育学研究 19: 3-14. (査読有)
- 2) 村瀬瑠美, 寺山由美(2018): 幼児期の身体表現活動における保育者の用いるオノマトペ: 身体表現活動におけるイメージに着目した分類. スポーツ運動学研究 31: 65-78. (査読有)
- 3) 成瀬麻美, 寺山由美, 永原隆(2018): 小学校体育授業における表現遊びの即興時に現れる3つの模倣の動き. 体育学研究 63(2): 769-784. (査読有)
- 4) 寺山由美(2017): 「表現運動・ダンス」領域における「身体表現」「意図のある動き」の形成から捉え直す. 体育・スポーツ哲学研究 39(2): 95-108. (査読有)

〔学会発表〕(計 3件)

- 1) TERAYAMA Yumi: To Dance or to Be Made to Dance: The Significance of Improvisational Expression in the Context of Dance Education. The 46th Annual International Association for the Philosophy of Sport (IAPS) Conference, 2018年.
- 2) 寺山由美: 学習内容としての身体観の育成. - 「表現運動・ダンス」領域の学習を考えるために. 日本体育・スポーツ哲学会第39回大会, 長崎, 2017年.
- 3) 寺山由美: ダンス学習における「意図のある」動きについて. 日本体育・スポーツ哲学会第38回大会, 千葉, 2016年.

〔図書〕(計 1件)

- 1) 寺山由美(2017) 2. 評定スポーツによる競技力. コーチング学への招待, 日本コーチング学会編. 74-76.

6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。